

# ヴィルヘルム・フォン・フンボルトの 言語論における「古典古代」の意味

渡 辺 学

「われわれドイツ人は、自分たちをギリシア人と比較しようと思った  
であろうか。」

(Herder 1881, 211)

## 1. はじめに

文豪ゲーテ、シラーと並び称され、ベルリン大学（現在のフンボルト大学）の創設者でもあるヴィルヘルム・フォン・フンボルト [Wilhelm von Humboldt, 1767-1835] がギリシア・ローマ、いわゆる古典古代についてものした著作は、Leitzmann が編集し 17 巻からなるベルリン版では随所にちりばめられているものの、代表的なもののいくつかは、Flitner/Giel の編になる 5 巻本のフンボルト選集の第 2 巻に収められ、読者の便に供されている。これまで、研究上の重点のひとつとしてフンボルトの言語論、言語哲学、さらには、ドイツ語圏における言語思想史とドイツ言語学の歴史叙述というテーマ圏に取り組んできた筆者<sup>1)</sup>の直接の関心は古典古代に向けられてはいなかったものの、それが言語についての省察に関わる範囲内においては、たとえばローマとギリシアをある種象徴的にその題目に収めた作品である „Latium und Hellas“ [1806] における言語への論及などは、長いあいだ興味の対象でありつづけていた。

以下本稿では、フンボルトの目に映じたかぎりでのギリシア（とローマ）がその思想体系、なかでも言語論においてどんな位置を占めるのか、また、その構図が現代の知的状況にとって何らかの意味をもち刺激を与えることがあるとすれば、どんな局面においてか、という問いを考究したい。ライブニッツほどではないにせよ<sup>2)</sup>、今日的にとらえられる意味での人文学、人文科学全般にきわめて造詣の深かったフンボルトの思想や考え方の筋道を理解するためには、個々のテキストと真摯に向き合うことは当然ながら、その根底にある人間観、人間学（Anthropologie）のありようとの関わりをつねに勘案する必要がある<sup>3)</sup>。以下では、基本的な姿勢としては個々のテキストから出発しつつ、この点にもできるかぎり意を注ぎたい。

まず最初の疑問は、フンボルトはなぜ、いったいどの点においてギリシア、およびギリシア語をあれほどまでに高く評価していたのか、というものである<sup>4)</sup>。そこに見られる理想化、あるいはコンプレックスの裏返しは、一見尋常でないものを感じさせてあまりある。彼の評価は正当であったろうか。フンボルトの個人史においてはそれが首肯され、ゆえあることであつたにしても<sup>5)</sup>、当時の時代状況にとってそれはどんな意味をもっていたのか、あるいは、今日の社会でそれはいかなる意味をもちうるのだろうか。この問題も、筆者には未決のものとして長いこと謎につつまれていた。

## 2. ギリシア人の性格

フンボルトのテキストのなかから、「ギリシア人」あるいは「ギリシア的なもの」の「性格（Charakter）」についての記述を探ることとしよう。フンボルトの比較的初期の作品である「古代、とりわけギリシア古代の研究について」[1793]には、「人間の研究は、あらゆる国、あらゆる時代のあらゆる民族・国民（Nationen）を探究し比較することで利せられる」（GS, I 264）<sup>6)</sup>と記されている。これは言うまでもなく、とりわけ個人の力では手に余る課題であり、フンボルト自身、人間の深い探究のためには、

「ほかの民族・国民のことも代表しているような民族・国民を取り上げてみる」（GS, I 264）ことを推奨する。彼にとって、それはギリシア人、なかでも、「古い」民族・国民とされる、「アテネ人」（GS, I 265）に他ならなかった。レトリックの技法に従えば、「部分で全体を（pars pro toto）」である。フンボルトは、「ギリシア人の性格には人間の根源的な性格が大部分現れている」（GS, I 275）とし、「ギリシアの作家が描いた人物（の性格）を探究することにより、人間の形成によい影響が及ぼされる」（GS, I 275）ものとする。その特性をさらに拾い出せば、「比喩表現を創造する想像力に比類なくすぐれている」（GS, I 266）ことや、先述の「ラティウムとヘラス」[1806]の論述を加えれば、「個別のものに拘束されることのない人間性」（GS, III 161）や「比類ないほどの、自然におちついた、何かに限定されることのない、また個別のものに拘束されることのない人間性」（GS, III 161）、「より崇高なもの、超地上的なものに移り行く永遠に働く志を有してい」（GS, III 155）ることが指摘でき、「理念を純粋に喜ぶところから超感性的なものに向かった」（GS, III 151）彼らは、（自分たちにとって）「芸術は自然よりも高く、神性をもっとも生き生きと雄弁に物語るシンボルであった」（GS, III 145）ような民であり、「形式の大きさと純粋さを志向」（GS, III 147）し、「神的なものへの欲求（Trieb）」（GS, III 149）をもって特徴づけられる。最晩年、1820年代から30年代にかけての言語論で日を追うごとにますます鮮明な形で「素材（Stoff）」に「形式（Form）」を対置し<sup>7)</sup>、後者により着目したフンボルトは、「ラティウムとヘラス」においても、「すべての上位には「形式」がある」（GS, III 150）としている。このアリストテレス的見方はフンボルトの中で終始一貫していると考えられる。ギリシア人は、「素材」や「感性」に飽き足らずに、「形式」や「超感性」「神的なもの」を希求した点において、「至高にしてバランスの取れた人間を形成するという高貴な目的」（GS, III 261）をかなえるのに最も有利な位置をしめていた民とされる。古典主義の洗礼を受けていたフンボルトこそが、西村の言を借りれば、

「[...] ギリシア精神へのドイツの信仰、ギリシア精神のなかで保管された、人間を気高くする価値を、体系化した」（西村 1990, 71）ということになる。こうしたギリシア像、ギリシア人像がどれほど歴史的事実、歴史の実態をふまえ、それにかなうものであるかについては、「人間存在の理念型としてのギリシア的人間」と題された章節において Dippel (1990, 72) も疑問視している<sup>8)</sup>。理想化、観念化された表象・形象としての「ギリシア人」こそがフンボルトには意味をもっていたことになる。現実態ならぬ欠如態であれば、それを希求することは、それを望む者の自由であるとすることもできる。

このギリシア人と事あるごとに比較されるローマ人の位置づけは、フンボルトにおいては総じて低い。ローマ人は国家宗教を営み、ギリシア人はそれに比べて民族宗教であった（現代風に言えば、政教分離が進んでいた）といった対比（vgl. GS, III 156-157）や、「ローマ人はギリシア人から汲みつくした」（GS, I 277）という依存関係の確認などはその例である。なお、「フランス人の明るい快活さ」（GS, II 39）といった形容をされるフランス人の位置も、「ローマ人の模倣の域を出ない」（GS, III 163）といった切り取り方に立てば相対的に見て決して高いものではない。

### 3. 言語論におけるギリシア語の位置

人間をとらえるその態勢におけるギリシア人の位置づけと言語を比較考量する際のギリシア語への視座がフンボルトにあっては酷似している。これは、（いわゆる「お国柄」とされているもの、および、それについての見方、捉え方、考え方という両方の面で）民族・国民性と呼ばれるものと、言語が相互に影響関係をもつことにも起因しているだろう。「ある国民は、いわば言語が描く世界の絵画に満足し、もっぱら世界にもっと光、連関、調和をもたらそうとする。別の国民は、いわば苦勞して思考に没頭し、表現の仕方がいつまでも不十分であると思い、それを適切なものにしようと

し、そのために形式の完成をないがしろにする。それで双方の言語はおのずからそれによって刻印づけられる。しかしながら、そこにはさらにニュアンスがある。内容が損なわれるとしても形式を重んじる国民は、一方で、主に論理的なニュアンス、特に明晰さと容易な理解力を必要とするニュアンスを追究したり、他方で、もっと想像力に訴える感覚的なニュアンスを追究したりする」（フンボルト 1989, 127）という、1822年の執筆と推察されている「言語の国民的性格について」におけるくだりは、言語と民族・国民の性格の相即性に想到させる個所である。

「ラティウムとヘラス」において、「言語の性格の叙述は、個人や民族・国民のそれ以上にむずかしい」（GS, III 166）とその困難を自覚していたフンボルトであったが、たとえば最晩年の言語論である「カヴィ語序論」においては、344ページの紙幅の一割強を割いて、すなわち、その第31～33節において「言語の性格」に論及している。すべての考察を「人間学」のバックボーンのもとに展開していたといっても過言ではない彼にとって、「ある民族の思考と感性の様態は、先述のように、それを通じてその言語に色彩と性格が伴ってくるものなのだが、最初期から言語に影響を及ぼしている」（GS, VII 166）のであるし、「この点については疑問をさしはさむ余地はないのだが、民族・国民の性格がそれに真に特有のものを基準として顕現する場合には、この性格はなにかんづく言語を通して現れるものである」（GS IVV, 179）と考えられている。

ここで「性格 (Charakter)」という語で表示されている概念は、哲学・思想史的にはライブニッツなどで名高い「普遍記号学 (characteristica universalis)」にもつらなる射程のものとしてとられることも可能である。単純に言えば、「記号」の解説・読解なのだが、人の表情・人相を見て、その人の内面を推量することや、鳥の群れの飛翔を見て、気象変化を、ネズミの大量移動を見て、天変地異の兆候を読み取ることも、大枠では同じ路線内に含まれる。記号でも象徴でも、それ自身をただ単に指し示しているのではなく、「それ以外のもの」を指示したり、ほめめかしたりする。

言語の構造、形態、機能をじっくりと観察することで、言語そのものを越えて、その使用者のことを見晴らす。それを透かし彫りにする。分かりやすく言えば、フンボルトはこのような構想を抱いていたと言えるだろう。とはいえ、どう鼻眞目に見ても言語の「性格」は、「(文法) 構造」に比してつかみどころのない、ぼんやりとした局面でもあり、その描写には多くのケースで独特の隠喩法<sup>9)</sup>が用いられ、論理的・概念的把握という意味での理解を阻害するところがある。彼自身の言葉を引けば、「したがって、精神が言語にどのように織り込まれているかを正確に追跡するためには、言語の文法的・語彙的構造をいわば堅固で外的な性格として、魂のように言語のなかに住まい、われわれが言語習得を始めるやいなやどんな言語にも独特なやり方で掌握されるという結果を生み出すような〔言語の〕内的性格と分けなければならない」(GS, VII 166)ということになる。形態的、形式的、外面的に、したがって客観的に把握し、具体的に指し示すことができる形態・文法などに比して、「内的言語形式 (die innere Sprachform)」「内的言語感覚 (der innere Sprachsinn)」とも隣接している「内的性格」というものは、言語を創造し、使用する言語使用者が世界を認識し、世界を分節する「能力」やその発揮のされ方に関わるとともに、美的なもの、構想力ともリンクする概念であると言えよう。これを仮に「隠喩 (や感性的表現形式) の優位」<sup>10)</sup>とか「言語的観念論 (主観主義)」と名づければ、後者の立場は、「言語の形成と使用には必然的に対象の主観的知覚の全様態が入っていく。というのは、語はまさにこの知覚から成立するのであり、対象自体の模写ではなく、対象について魂のなかで産出される像の模写だからである」(GS, VI 179)との所説に表明されている。なお、この「主観性」が「民族・国民」という共同体の単位でくくられていることは、「同一の民族・国民のなかでは、言語の同種の主観性が作用するものでもあるので、どの言語にも独自の世界の見方がある」(GS, VII 60)という有名な言説に明らかである。フンボルトの思想、着想の多くはヘルダーに負っているという指摘は定説ともなっているが、コ

ヴィルヘルム・フォン・フンボルトの言語論における「古典古代」の意味（渡辺）

ーンが（ヘルダーにおいて）*nationality* を構成するものとしていわば同列に挙げた「共通の祖先、言語、領土、国家、習俗、伝統、宗教」（嶋田 2007, 168）のうち、フンボルトにおけるその比重は晩年に近づくにつれて、より鮮明に言語へと焦点を当てられていく。「住居、風土、宗教、法制、生活習慣はある国民の暮らしに伴う状況だが、言語は [それ以上に] 国民の吐息であり、魂であり、つねにそれに相伴うものだ」（GS, II 166）という「ラティウムとヘラス」における記述には、こうした「言語（至上）主義」の萌芽が見られる。

フンボルトは当時の歴史比較言語学の達成をふまえつつ<sup>11)</sup>、サンスクリット、ギリシア語、ラテン語を同系列に属するものとしておおむねひとくくりにとらえる（GS, VII 188-189; 169 など）。彼にとってラテン語は、「純粋な文法構造」（GS, VII 242）をもつものであり—これは「ラティウムとヘラス」などの記述をほうふつとさせるところでもあるのだが—ギリシア語の文法形式には、「ギリシア人の想像力の大きいなる運動性と美的感覚のよわらかさ」に起因する「より大きな軽快さとしなやかさ、より好ましい典雅さ」（GS, VII 190）が備わっているとされる。さらに、ギリシア語に言及して、「その好適な有機体、純正な屈折性、その総合的な力」（GS, VII 237）とその美点を枚挙する個所もある。さまざまな言語を図式的に総括してわかりやすく示すためには、中国語の対極にあるサンスクリットが引き合いに出される（GS, VII 271; 274 など）。「カヴィ語序論」における文法構造の説明はむしろサンスクリットを基軸としていると言ってよい。ただし、これらの屈折言語も前述の「言語の性格」においては異なるわけである（GS, VII 169）。「性格」への着眼が、やはりフンボルトを同時代の歴史比較言語学者と分かち最大のメルクマールであろう。

#### 4. 現代からの照射

フンボルトにそのテキストから語らせること。フンボルトをそのテクス

ト解釈から再構築すること。その同時代のコンテクストの中で読み解くこと。思想の系譜<sup>12)</sup>、思想の類似性の想定、特定にあっては、自伝的、書誌文献学的に厳密な方法に基づいて修史学（歴史叙述）的に慎重を期すること。「先行研究あるいは著作権という考えがなかった18世紀」（嶋田2007, 88）というヘルダーの世紀の特徴づけに毛の生えたようなフンボルトの時代を読む際にも、引用の仕方、自説と他者の説の区別の仕方とその時代にとっての慣行でもあった制約の存在を意識しておくこと。これらの正当性を十二分に認めたくえて、あえてやはり最後に、フンボルトの思想から現代への橋渡しを企てたい。

再度翻って考えるなら、ギリシア人を単独の、統一的なものとして想定すること、さらに言えば、民族・国民を単位として見ることはどんな意味をもつのか。先の引用箇所からも分かるように、ギリシア人といっても、その実はアテネ市民や一部の教養層のことが指し示されている可能性が強い。彫刻や絵画、文学、歴史書などを著した・表した、あるいはそれらに表されている一部の人物である。現実においては、さまざまな部族・氏族の集合体として民族・国民があり<sup>13)</sup>、より小さい共同体、グループにおいてもそれぞれにアイデンティティが成立しているはずである。この点をフンボルトはどの程度意識していただろうか、と現代的、社会学的、社会言語学・変種言語学的な問いを立ててみることもできる。また、民族性のような共同体への帰属性を想定することは、どうしても一般化、ステレオタイプ化のそしりを免れるものではない。ある種の形容によってくられた「性格」を文字通り体現している人はまれで、周知のように、最終的には個々人の個性・個別性が常に相伴うからである。現にフンボルト自身が、1796年ごろ執筆されたものと推定される「十八世紀」という長大な論考<sup>14)</sup>のなかで、「種族、民族・国民、個人を通常の語法において特徴づけるのに一般的に用いられている方法」として、「女性は弱くて恒常性がなく、男性は堅固でわがままであり、フランス人は機知に富みながら軽率で、イタリア人は執念深い半面ぜいたくで、ドイツ人は些事に拘泥して模



傲をよくする」(GS, II 100) といった見方をするのはあまり意味がない、と主張している。別所には、「[...] 種族、年齢、気質、民族・国民、位階、なりわいといったもののひとつひとつが要因となって個人が規定される」(GS, II 111) とも記されている。あるグループ化が行われる抽象レベルの選定にあたっては注意が必要であること、ステレオタイプには危険が伴うことを、フンボルトもうすうす感づいていた、ということになる。

フンボルトの人間論、ないしは思想全体において、「自由 (Freiheit)」、  
「個別性／個性 (Individualität)」は特別な位置を占めているように思われる (Schiller 1998 etc.)。その際、「自由」の要件は何か。また、個人 (個物) は、民族・国家といった共同体との連関において、さらには、人類という類概念との連関においてどのような位相に立つのか。同時代の別の論者との関連においてフンボルトを読み解く企てとその背後にある思想的な問いについて、本稿でもはや詳論するゆとりはないが、いくつかの所説を引き、読み解くことで、それへ向けての端緒としたい。

「個性が相違の統一であるということについては触れる必要はない。個性は、ある言語が他の言語と区別される特性に、同じ仕方で影響を与えたりうけたりする一様性の認められるところにおいてのみ、明らかとなる。しかしながら真の精神的な個性は、すでに高度に発達した言語にだけみられる。

このような個性についての研究、いや、個性をもっと正確に規定することは言語研究で最もむずかしい。個性は、ある程度しか描き出されえないもので、ただ感じられるものだということは否定できない。だからといって、個性は科学的な言語研究の範囲内から締め出されるべきなのだろうか」(フンボルト 1989, 116)。「言語の国民的性格について」のこのくだりからは、「現代的問いかけ」とのすりあわせを試みる視座に立てば以下のようなことが読み取れると思う。言語が個人個人で異なること、言語使用のたびごとに異なることは実験音声学や談話分析を挙げるまでもなく、わ

れわれの日常的経験であり今日了解事項のひとつである。そんななか、あえて「日本語」や「ドイツ語」などの大きなくくりにおける言語にこだわることで、個別性、具体性を越えたレベルでのある種の「共通性」が抽出されてくる。「日本語」や「ドイツ語」を通じて見えてくる、（ある程度抽象化、一般化された）「個別性」である。フンボルト自身を引けば、「個々の言語とは類としてではなく、個体として異なるのであり、それらの性格は類の性格ではなく、個別的な性格である」（GS VI, 150）わけで、力点はあくまでも「個別性」の方に置かれているとも読める<sup>15)</sup>。このような視座の限定は、フンボルトの時代や当時の典拠が主に「書きことば」の資料であったという資料的制約を差し引いても、やむをえないところであったし、正当性をもちうるものではないか。「言語における個性の研究」という困難で、むしろタブー視した方がよさそうな課題を、フンボルトは自らの、あるいは近未来の課題として設定しようとした。ここには言語研究のフロンティアであろうとするフンボルトの「言語研究計画」立案の意思が見て取れる。

フンボルトのものの見方、筆の運び方には、唯一の立場に拘泥しない「相対主義」的な見地というものがある。これは、優柔不断であったり<sup>16)</sup>、あまりにも外交的であるといった印象に結びつくこともあろうが、よく言えば、言語をはじめとする物事、事柄の多面性を見逃さない「複眼的思考」の事例であるとも考えられる。この姿勢は、フンボルトを「ナショナリスト」であるとして断罪したり、徹底的に否定・非難することをむずかしくもしている。「[...]（この語を通常の意味に理解すれば、）ある言語の個性とは、比較的個性であると言えるに過ぎないものでもあり、真の個性はその都度話している者のなかにある。個人のなかではじめて言語はその究極的な規定を受ける」（GS, VII 64）との言説は、「パロール」を想起させ、「言語は、わたしがそれを自分のしたいように産出するのであるからわたしに属する。それでいて、そのことの根拠は同時にあらゆる人間種族の話や話したことのうちにあるので、[...] わたしが制限をうけるのも

また言語自体からなのである」（GS VII, 64）という主張は、「ラング」に連なり、また、人類への接続においては「ランガージュ」<sup>17)</sup>にも接合する。「[...] 言語のなかでは一般的に一致していながらの個別化が驚くほどに進んでいるので、全人類はただ一つの言語を話すと言うことも、どの人間も特別な言語を所有していると言うことも同じように正しい」（GS, VII 51）というものの言い方を参照すれば、フンボルトはただ単に言語の多面性を引き合いに出している、ということよりも、こうしたさまざまな位相をひとつひとつ見逃さずに、その位相間を横断・縦断することを求めているようにまで思われてくるのである。最後に、フンボルトは、18～19世紀という時代のなかにあって、ひとつの国家のなかにも多様な言語（や文化）をもつ共同体が並存することを当然のように正しく理解していた。方言と言語の区別のむずかしさに言及した個所（GS, VI 243）、われわれは「低地ブリテン」を捨象して「フランス国民」と言う、とか、「ヴァスク、ヴァレンシア、カタロニア」を無視して「スペイン国民」と言うなどと、あえて注意を喚起している（GS, VI 187-188）ところなどからこの認識があったことは明らかであるし、「一般的に言語と言うとき、これは悟性の抽象作用である。実際には言語はつねにもっぱらある特別なものとして、つまりきわめて個別的な形姿で、方言として現れる」（GS, VI 241）<sup>18)</sup>との言説は、「変種言語学」者、「社会言語学」者としての資質を示している。言語のさまざまな位相を自由自在に行き来する術を心得ていたフンボルトのことだから、けっして意外なことではないであろう。フンボルトの調査、研究上の重点が、どちらかと言えばむしろ「ドイツ語」、「フランス語」などの比較的大きなくくりの方であったというだけのことである。このように見ると、彼はその言語との関わりにおいて、時代に先駆け、時代を越えていたとすることができる。

#### 注

1) たとえば、渡辺（1983, 1985a, 1985b, 1985c, 1987, 1993, 2001, 2006）,

- Watanabe (1986a, 1986b, 1989, 1991a, 1991b, 1996, 1997, 2004, 2005) を参照。
- 2) ライプニッツの業績、とりわけ、ドイツ語とドイツ人に関わる業績に関しては、ライプニッツ (2006) および、同書の解説を参照されたい。
  - 3) Schmitter (Hg.) (1991) は、フンボルトの思想の歴史的变化のなかにも統一性を見出そうとする試みである。
  - 4) たとえば、Spranger や Menze の叙述をもとにした Borsche (1990, 17) の記述である、「[...] ギリシア人は彼 [フンボルト] にとってただ単に別民族、別の文化であったのではない。ギリシア人は特権化された他者、そこからわれわれが自らを導き出し、それをもとにしてまづもって、また最終的に自らを測ることが許され、測ることができ、またそうしなければならない他者であるのだ」との所説を参照のこと。これが、けっして机上の空論、抽象論に終始するものではないことは、フンボルトが自ら『アガメムノーン』の翻訳に携わり、こうした実践を踏まえつつ、ギリシア語の韻律などをドイツ語に移入したもとして、クロップシュトックやフォスの翻訳を通じたドイツ語富裕化の功績をたたえていることを視野に入れてはじめて理解できる。この点については、フンボルト (2008, 77-78) を見よ。
  - 5) 「ギリシアの言語と文学に対するフンボルトの興味はすでにその少年期に呼び覚まされた。少年のころ彼はすでにギリシャ語を話し、読むようになった。エンゲルスの講義によってギリシア哲学への入門を終えた彼は、大学での研究を始める以前にソクラテスとプラトンを論じた論考を著した」(Scuria 1976, 117-118) という伝記的記述は、この点を補強する傍証ともなる。
  - 6) フンボルトのテキストからの引用は、特別の指示がないかぎり Wilhelm von Humboldt (1903-1936) により、略称の GS のあとに巻数、頁数を記すものとする。
  - 7) 典型的な個所としては、「形式にはたしかに素材が対立する。しかし言語形式の素材を見出すためには、言語の境界を越えなければならない」(GS, VII 49) で始まり、52 頁まで続くくだりが挙げられる。
  - 8) さらに、Flitner/Giel の注釈によれば、フンボルトがギリシア史に本当の興味を抱いたのは、デモステネスを読んだ 1807 年の春のことらしい (Humboldt 1981, 384)。
  - 9) これは、個々の用語法にも当てはまるし、「そもそも言語は芸術を思わせることがしばしばだが、その手順の最も深く、説明が難しい部分においてとりわけそうである。彫刻家や画家でも理念を素材と結合させるわけだが、その作品を見れば、この結合が内奥までいきわたって自由のうちにある真の才覚から輝き出るのか、切り離された理念が鑿や筆をつかって大いに苦勞し、自信なくいわば書き写されたものなのかが見て取れる」(GS, VII 95-96) といった比喩的な表現法

にも見られる。フンボルトの言語論を論じたトラバントの、「エネルゲイア、つまり「その場かぎりで一回だけ行われる発話」という周知の言語の規定は（VII, S. 46）、フンボルトにおいてはつねに相互に交わされる対話言語を意味しているが、それをあらわす比喩群のなかでは、楽器の振動という音楽的現象として、そして本質的には音声的現象として示されている」（トラバント 2009, 254）との指摘をも参照。

- 10) ただし、ヘルダー [Johann Gottfried Herder, 1744-1803] と比べた場合に、情熱的な筆致がやや抑えられ気味に思われるのは、「フンボルトはカント主義者であるゆえに言語をカントの哲学のシステムのなかで考える。人間の心情の力の両面、すなわち感性と悟性が思考の生産において協働する」（Trabant 2002, 86）というフンボルトの思想性の背景とも関わるかもしれない。
- 11) その前段とも言える、シュレーゲルらによる「比較文法」の誕生についての概観は、風間（1978, 33-42）などを参照のこと。
- 12) これについては、渡辺（2001）を参照されたい。
- 13) 「個人的性格というものが民族・国民のなかに移行する際の手段は出自と言語である」（GS, III 166）という主張を読むと、「言語」を観察する、それについて省察することではじめて「民族・国民」という単位・くくりが明確なものとして意識されるようになるとの解釈も成り立つ。
- 14) この論考の執筆構想には、1796年2月2日のシラー宛の手紙で言及がなされているという。Humboldt（1981, 339-340）を参照。
- 15) 一見堂々巡りに陥りそうなこの係争点については、Navarro-Pérez（1993, 156-191）をも参照のこと。
- 16) 1816年に記された、本人の自伝的自省察からすると、フンボルトは、「ふたつの系列の考えのあいだで容易に揺れ動き、片方を採ろうとした瞬間にもう片方のほうがすぐれているように思ってしまう」（GS, XV 459）性向をもつという。
- 17) フンボルトの用語法では、„Sprachvermögen“（GS, VI 178）。
- 18) Schneider（1995）に従えば、フンボルトの考えでは、「人間をもっぱら個性としてながめ、あるいはもっぱらどんな個性をも欠いた存在としてながめることは、哲学的抽象によってのみ可能である」（Schneider 1995, 69）と言える。

## 参考文献

- Tilman Borsche（1990）: *Wilhelm v. Humboldt*. München: Beck.
- Lydia Dippel（1990）: *Wilhelm von Humboldt. Ästhetik und Anthropologie*. Würzburg: Königshausen & Neumann.
- Johann Gottfried Herder（1881）: *Herders Sämtliche Werke*, hrsg. von Bernhard Suphan. 17. Bd. Berlin: Weidmannsche Buchhandlung.

- Wilhelm von Humboldt (1903-1936): *Wilhelm von Humboldts Gesammelte Schriften*, hrsg. von der Königlichen Preußischen Akademie der Wissenschaften. 17 Bde. In 4 Abteilungen. Berlin: Behr (Nachdr. Berlin: de Gruyter 1968-1969).
- Wilhelm von Humboldt (1981): *Werke in fünf Bänden, V: Kleine Schriften, Autobiographisches, Dichtungen, Briefe. Kommentare und Anmerkungen zu Band I-V, Anhang*, hrsg. von Andreas Flitner/Klaus Giel. Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft.
- W. v. フンボルト (C. メンツェ編、K. ルーメル／小笠原道雄／江島正子訳) 『人間形成と言語』(以文社) 1989
- ヴィルヘルム・フォン・フンボルト (三ツ木道夫訳) 『『アガメムノーン』翻訳への序論』、三ツ木編訳『思想としての翻訳』(白水社) 2008、73-85 頁。
- 風間喜代三『言語学の誕生—比較言語学小史—』(岩波書店) 1978
- 西村貞二『フンボルト』(清水書院) 1990
- G. W. ライプニッツ著 (高田博行／渡辺学共編訳) 『ライプニッツの国語論 ドイツ語改良への提言』(法政大学出版局) 2006
- Jorge Navarro-Pérez (1993): *Sprache und Individuum. Ein Versuch über den Gedanken der nicht mehr zu findenden Einheit in der Sprachphilosophie Wilhelm von Humboldts*. Wuppertal: Deimling.
- Herbert Scuria (1976): *Wilhelm von Humboldt. Werden und Wirken*. Düsseldorf: Claassen.
- Hans-Ernst Schiller (1998): *Die Sprache der realen Freiheit. Sprache und Sozialphilosophie bei Wilhelm von Humboldt*. Würzburg: Königshausen & Neumann.
- Peter Schmitter (Hg.) (1991): *Multum—non multa? Studien zur Einheit der Reflexion im Werk W. v. Humboldts*. Münster: Nodus.
- Frank Schneider (1995): *Der Typus der Sprache. Eine Rekonstruktion des Sprachbegriffs Wilhelm von Humboldts auf der Grundlage der Sprachursprungsfrage*. Münster: Nodus.
- 嶋田洋一郎『ヘルダー論集』(花書院) 2007
- Jürgen Trabant (2002): Das tote Gerippe und die Arbeit des Geistes. Überlegungen im Anschluss an Humboldt. In: Sybille Krämer/Ekkehard König (Hgg.): *Gibt es eine Sprache hinter dem Sprechen?* Frankfurt/M.: Suhrkamp, 2002, S. 76-96.
- ユルゲン・トラバント (齋藤元紀／村井則夫訳) 「フンボルトのグラマトロジー—言語の本性への斬新な洞察—」、『思想』、No. 1023 (2009 年第 7 号)、岩波書店、

240-271 頁、2009 年。

渡辺学「記号・象徴・言語—ヴィルヘルム・フォン・フンボルトの場合—」、『詩・言語』、第 20 号、東京大学文学部独文研究室 詩・言語同人会 (朝日出版社)、57-72 頁、1983 年。

渡辺学「フンボルトの『内的言語形式』再考」、『詩・言語』、第 24 号、東京大学文学部独文研究室 詩・言語同人会 (朝日出版社)、1-10 頁、1985 年 (=渡辺 1985a)。

渡辺学「フンボルト研究の近況と展望—没後 150 周年にあたって—」、『獨協大学ドイツ学研究』、第 15 号、獨協大学外国語学部ドイツ語学科、83-105 頁、1985 年 (=渡辺 1985b)。

渡辺学「言語と自然—フンボルトを読む」、『獨協大学ドイツ学研究』、第 15 号、獨協大学外国語学部ドイツ語学科、107-172 頁、1985 年 (=渡辺 1985c)。

Manabu Watanabe: Zum Problem des Übersetzens bei Wilhelm von Humboldt, 『Symposion』、第 1 号、ドイツ語学文学研究会 (同学社)、43-50 頁、1986 年 (=Watanabe 1986a)。

Manabu Watanabe: Einige Bemerkungen über die Humboldt-Rezeption in Japan. In: Arwed Spreu (Hg.): *Protokollband Teil II, Humboldt-Grimm-Konferenz, Berlin 1985*, Humboldt-Universität zu Berlin (Sektion Germanistik), 1986, S. 65-69 (=Watanabe 1986b)。

渡辺学「東ドイツのフンボルト研究について」、『獨協大学ドイツ学研究』、第 17 号、獨協大学外国語学部ドイツ語学科、35-52 頁、1987 年。

Manabu Watanabe: Notizen zur Historiographie der Linguistik, 『獨協大学ドイツ学研究』、第 21 号、獨協大学外国語学部ドイツ語学科、47-60 頁、1989 年。

Manabu Watanabe: Zum Verhältnis von Natur und Sprache bei Wilhelm von Humboldt. In: Peter Schmitter (Hg.): *Multum—non multa? Studien zur Einheit der Reflexion im Werk W. v. Humboldts*. Münster: Nodus, 1991, S. 43-66 (=Watanabe 1991a)。

Manabu Watanabe: Wilhelm von Humboldt in Japan. Bemerkungen aus der Sicht eines japanischen Germanisten. In: Peter Schmitter (Hg.): *Multum—non multa? Studien zur Einheit der Reflexion im Werk W. v. Humboldts*. Münster: Nodus, 1991, S. 149-168 (=Watanabe 1991b)。

渡辺学「言語学の歴史記述における時代区分について」、『獨協大学ドイツ学研究』、第 30 号、獨協大学外国語学部ドイツ語学科、145-154 頁、1993 年。

Manabu Watanabe: Das Abenteuer, ein systematisches Sprachstudium in die Wege zu leiten. Zu Wilhelm von Humboldts Konzeption der <allgemeinen Sprachkunde>, 『獨協大学ドイツ学研究』、第 36 号、獨協大学外国語学部ドイ

ヴィルヘルム・フォン・フンボルトの言語論における「古典古代」の意味（渡辺）

ツ語学科、89-95 頁、1996 年。

Manabu Watanabe: 〈Sprache〉, 〈Volk〉 und 〈Nation〉 bei Herder, Adelung und Humboldt, 『言語・文学・コミュニケーション』, 早川東三他編（同学社）、401-412 頁、1997 年。

渡辺学「ヴィルヘルム・フォン・フンボルト言語思想の系譜」、『エネルギー』、第 26 号、ドイツ文法理論研究会（朝日出版社）、91-105 頁、2001 年。

Manabu Watanabe: Über die Entwicklung der Sprachwissenschaft im deutschsprachigen Raum vom 18. Jahrhundert bis Anfang des vorigen Jahrhunderts. Statt einer Einleitung, *Neue Beiträge zur Germanistik* (Internationale Ausgabe der Doitsu Bungkau, München: iudicium), Band. 3/Heft 5, 2004, S. 25-40.

Manabu Watanabe: Wilhelm von Humboldt. Über einen Sprachwissenschaftlicher, der zur Goethe-Zeit und darüber hinaus wirkte, In: Japanische Goethe-Gesellschaft (Hg.): *Goethe-Jahrbuch*, Bd. XLVII, 2005, S. 41-55.

渡辺学「ヴィルヘルム・フォン・フンボルトとアジア諸言語—1828 年の英文書簡を手がかりに—」、東京大学大学院人文社会系研究科・ドイツ語ドイツ文学研究会編、『詩・言語』第 65 号、13-26 頁、2006 年。

（ドイツ語圏文化学科 教授）



# **Zum Stellenwert des „Alterthums“ in der Sprachtheorie Wilhelm von Humboldts**

**Manabu WATANABE**

(Resümee)

Seit ich mich mit der Sprachtheorie und -philosophie Wilhelm von Humboldts und mit der Geschichte der Sprachideen im deutschen Sprachraum, sowie mit der Historiographie der deutschen Sprachwissenschaft beschäftigte, waren seine Ausführungen über das Altertum u. a. in den sprachtheoretischen Schriften für mich von Interesse und Belang. Im Folgenden wird der Frage nachgegangen, was für eine Stellung (Rom und) Griechenland, wie sie Humboldt vorschwebten, in seinem Gedankengerüst einnahmen und ob und wie die diesbezüglichen Konturen nach dem heutigen Wissensstand Anstöße geben können. Seine Idealisierung Griechenlands ist bspw. erst dann nachvollziehbar, wenn man bedenkt, wie stark Humboldt sich mit der Übersetzung von „Agamemnon“ ins Deutsche befasste und er z. B. Klopstocks Übersetzungen, wobei er auch die griechische Metrik ins Deutsche übertrug, als Bereicherung des Deutschen zu schätzen wusste.

Um das Studium des Menschen gewinnbringend durchzuführen, empfiehlt es sich laut Humboldt, Nationen zu wählen, „welche gleichsam mehrere andre repräsentiren“. Die Athener waren für ihn ein Garant dafür. Der Grieche suchte nach der Überzeugung Humboldts „aus reiner Freude an Ideen“ „die Natur des Uebersinnlichen in den reinen Ideen“. Wie weit seine idealisierten Vorstellungen über Griechenland und den Griechen den historischen Tatsachen entsprechen, sei erst einmal dahingestellt.

Der anthropologisch erfasste Stellenwert des Griechen bei Humboldt erinnert

uns an seine privilegierende Blickrichtung auf das Griechische neben dem Sanskrit und dem Latein beim vergleichenden Erwägen der Sprachen. Humboldt ist sich der gegenseitigen Abhängigkeit von Sprache und Nationalcharakter bewusst. Wenn er von dem (inneren) Charakter der Sprachen spricht, sind sowohl seine Terminologie als auch sein Stil durch eine Metaphorik gekennzeichnet, die dem logisch-begrifflichen Verstehen im Wege steht. Mit der Annahme einer in der Sprache herrschenden „Subjectivität“ vertritt Humboldt einen sprachlichen Idealismus bzw. Logozentrismus.

Wenn man wagt, die Humboldtschen Gedanken mit den gegenwärtigen Fragen zu verbinden, mag man bspw. Humboldt entgegenhalten wollen, dass man in Wirklichkeit ebenso kleinere Gemeinschaften/Gruppen als Nationen als identitätsstiftend gelten lassen könnte. Bei der aufmerksamen Lektüre der Humboldtschen Texte wird man jedoch letztendlich gewahr, dass er schon wusste, dass man beim Selektieren der Abstraktionsniveaus für die Verankerung einer Gruppe vorsichtig vorgehen sollte und dass er sich darüber hinaus der Gefahr des Stereotypisierens bewusst war. Hinzuzufügen ist noch, dass Humboldt auf die Individualität der Sprachen hingewiesen hat, ohne dass er deshalb bspw. als ein bloßer Nationalist abgestempelt werden könnte und dass er mit seiner Unterscheidung von „Langue“- , „Parole“- und „Langage“-Ebene und seinem bewussten Gegenüberstellen der Sprach(en)vielfalt in einer Nation/einem Staat durchaus als Variations- und Soziolinguist im modernen Sinne gelten kann. Auch in diesem Gebiet war er seiner Zeit um Einiges voraus.